



↑ 千本松にある北端点
(千本松の観象台)
← 中から発掘された石室
※西那須野町郷土資料館紀要より。



南端点(大田原市)



南端点(大田原市)から千本松の北端点に向かってまっすぐのびている那須基線(たて道)

※出典:国土地理院ウェブサイト(<http://maps.gsi.go.jp>) 地理院地図を加工して使用。

「千本松の観象台」 ～近代測量の基点と本州一長い(?)直線道路～

7月5日号の「日本遺産」特集はいかがだったでしょうか？
何となく知っている地域の歴史ですが、これをきっかけにもっと興味を持ってもらえれば幸いです。
さて今回は、この「日本遺産」を構成する文化財のひとつ、見た目より意外とすごい「千本松の観象台」を紹介します。

私のまちの 近い 世界遺産

Topic

開拓地を見渡せる塚

一区町にある「親王台」と呼ばれる塚。たて道の近くにあるこの塚は、明治14年(1881)年に当時の親王(明治時代は天皇の子から孫の孫までの男子をさす)が那須野が原の開拓を訪れる際、開拓地をよく見渡せるようにと築られました。ひょっとしたらその頃は、親王台に登ると、どこまでも真っすぐに伸びる道を眺めることができたのかもしれませんがね。

「日本遺産」ってなあに？

日本遺産(Japan Heritage)とは、文化財を始めとした地域の歴史的魅力や特色を地域活性化に活用しようという文化庁の事業です。本市・大田原市・那須町・矢板市の4市町で申請した明治期における那須野が原開拓の歴史が、日本遺産に認定されました。詳しくは、広報7月5日号をご覧ください。

日本遺産 検索

「千本松の観象台」は、農研機構・畜産研究部門(旧・畜産草地研究所)の正門脇にある、高さ1mにも満たない直径2mほどの小さな塚のこと。観象台とは本来、天体・気象などの観測や研究をする所を指しますが、この観象台は、近代国家を目指した明治政府が設置したもので、近代測量の基点になったと言われています。

日本における近代測量は、明治初期に外国人の指導により始められ、明治8年(1875)、関東地方全域を対象とした三角測量である「関八州大三角測量」が実施されました。当時の那須野が原は、平坦な原っぱで視界を遮るものがないことから、測量の基準を設ける最適の場所として選ばれました。

「千本松の観象台」は「北端点」と呼ばれており、これと対を成す観象台が大田原市にあります。こちらは「南端点」と呼ばれており、2点を結んだものが「那須基線」となり、三角測量の基準線となったのです。2点を結んだ距離は約10.63km。現在では「たて道」と呼ばれ、地域の皆さんの生活道路となっています。

観象台の中には、大谷石でできた一坪ほどの正方形の石室があり、中から測量用具と思われる金具が見つかっています。当時はこの石室の上に木造の檣が組まれ、距離を測る目印とされました。そのほか、発掘作業ではお皿の上に載った「魚の骨」も見つかっています。これは観象台を建設したときの神事による供物と思われる。